

昨年、TBSの俳句番組で人気の夏井いつきさんにインタビューさせて頂く機会を得た。俳句を真剣に語る彼女の熱い涙を目の当たりにし、もらい泣きした。この時、少しだけ俳句をかじってきて良かったなあと思った。

川柳との違いもよく分からなかった私が、俳句を始めたのは偶然だった。ある日、大学のOB会（慶応義塾三田会）が地元、東村山にできるという知らせが我々夫婦に届いた。同会には、会員の親睦のために、麻雀、ボーリング、ゴルフ等八つの同好会があったが、私は妻に誘われ俳句同好会に参加することにした。

句会（三田会俳句同好会）の会員は9名。毎月兼題が決まり、3句を投稿、公民館で約3時間句会を開催する。一番を「天」として好きな句を4句選び、選んだ理由をコメントしていく。倍率0.75倍で楽勝と思い参加した初日、自己紹介で顔ぶれに驚いた。結社に所属する昭和一桁生まれの姉御や、有名作家と交流のあった出版社の元編集長もいる。古文が大嫌いで、文系でも入試に古文のないこの大学を選んだ私には場違いだと気づいたが、後の祭りだった。

選句の発表では、擦りもせず三球三振。コメントが皆から述べられ、鳥肌もの大ディスカッション大会が始まる。作者の観点に共鳴する者、全く違う視点から更に踏み込んで捉えていく者。語順や助詞が大切な働きをしたり、何気ない言葉が別の季節を表す季語だったり、眼から鱗だ。辛口ではあるが、皆赤ペン先生の如く真摯に改善を図っていく。私のダメ句に対しても、容赦ないコメントの嵐。終わる頃にはへとへとだが、なぜかサウナで汗をかいた後のように身が軽やかになる。この解放感を味わい、病みつきになった。

短い言葉で人に思いや感覚を伝える事の難しさ。伝わった時の快感。気づいたら四六時中、俳句を考えている自分がいた。通勤電車、布団の中、仕事でも指折り数えて575。スマホを片手に季語を探し、類句を調べ、思いついた句を保存する。こんな作業を繰り返し、句会に足しげく参加するうちに、句が選ばれ、皆から「天」を頂けるようになると有頂天となった。自分が次第に俳句に占領されてくる。

句会に参加して、自分が言葉や助詞の意味や語順、季節の兆しなどに関心を持つようになった事に気づく。自分より遥か年上の方々の柔軟さ、貪欲さ、謙虚さにも驚かされる。お元氣な諸先輩の姿を見ていると勇気が湧いてくる。この会は、コロナ禍でもメールでの交流を活用して継続しながら進化し



東村山三田会俳句同好会 句会

ている。ここでの仲間との繋がりが、自分を「自己満足」から「切磋琢磨」の境地に招いてくれる。

俳句は、わび茶や枯山水同様、引き算の美学。偶然、この会に出会えた事に感謝する。もし仕事で私が指を折っていたら、魂はきっと幽体離脱して野山をハイキング (HAIKU+ING) していることだろう。

スマートで俳句  
ラブリー  
ハイキング



一般財団法人地域社会ライフプラン協会

丸 弘之